

なぜ今、『支笏湖歴史年表』か

先 田 次 雄

自然公園財団支笏湖支部職員

支笏湖ビジターセンターで働くようになってからお客様に「それ、いつもの出来事ですか？」などと、聞かれることが予想以上に多かった。話の流れから、何気ない質問だということは分かっている、やはりきちんと答えるのが仕事。記憶をたどり、資料をあさってお答えするが、そのようなきに限りお時間をいただくことも可能だが、面と向かって話をしていてお客様を二〇分も二〇分も待たせるわけにはいかない。

持ち時間は、インスタントラーメンではないが、せいぜい三分。どうしても不正確な、自信のない答えになりがちだが、いつも気になっていた。お客様が帰った後に調べ直すことが多いが、同じ事象でも資料によって特に年月日が異なるケースが案外多いことに気が付いた。

せめて年月日だけでもきちんとしたい。支笏湖との付き合いが長く、支笏湖関係の資料をたくさん溜めこんでいたこともあって、独自の年表をまとめてやろうと思いついたのが平成二十五年度の春だった。

軽い気持ちで始めたが、一カ月間で「とんでもないことに首を突っ込んだ」と思い始めた。多種多様な資料があるが、記載内容が若干だがずれているケースが予想以上に多く、いったいどれを「信用できるか」が分からなくなってきたのだ。資料上の年月日が違っていても「〇〇が起きた」「〇〇をつくった」などの出来事だけは同じなので、その一つひとつについて検証をしなければならない、とあきらめがつくまで数か月間かかってし

まった。

あきらめと、開き直りの中で方向性が固まると、あとは各項目について、できるだけ引用ではなく原文に近い資料を調べていった。複数の資料で一致すれば正解。

最も役立ったのは行政資料と新聞記事の日付、続いて社史など関係者が直接まとめた資料、論文などの学術資料。最も危ないのは引用先がはっきりしないインターネット上の情報だった。ただし、自分で資料収集と分析を行っている一部のホームページには、その努力に脱帽、いや尊敬の念すら抱いた。

結論でないことも多かった。

例えば、支笏湖の全面結氷。近年の平成十三（二〇〇一）年、昭和五十三（一九七八）年、昭和二十八（一九五三）年については写真が残されているが、それ以前については『北海道水産試験場千歳支場支笏湖孵化場日誌（孵化場日誌）』「2001年、支笏湖と洞爺湖は凍った理由」Ⅱ魚と水2002年Ⅱと地元支笏湖の郷土史研究家高橋長助の『あなたをまつ支笏湖』が記述している。

『孵化場日誌』では大正二（一九一三）年全面結氷の記載があるだけだが、『あなたをまつ支笏湖』では明治四十三（一九一〇）年、大正三（一九一四）年、昭和十九（一九四四）年、昭和二十年の四回全面結氷したことになっている。

支笏湖地区開発に大きな足跡を残した王子製紙の千歳川水力発電所の建設時期については、関連資料として『王子製紙苦小牧工場創業一〇〇年のあゆみ（一〇〇年のあゆみ）』、『増補千歳市史（増補）』、『苦小牧市史』などを見た。

その中で最初に建設された第1水力発電所については、『一〇〇年のあ

ゆみ』では第一堰堤・水溜竣工が明治四十二（一九〇九）年十一月十日、送電開始が四十三年七月十二日。『苦小牧市史』では四十二年九月十一日竣工、『増補』では四十三年九月竣工。水溜の同発電所展望台に設けられた案内看板には建設年月日が四十三年五月二十八日と記載されていた。

ちなみに苦小牧工場の操業開始は明治四十三年九月で共通していた。余談になるが、『一〇〇年のあゆみ』によると、苦小牧工場について四十二年十二月二日仕上室屋上で上棟式、同月二十七日建物工事完成で請負業者から引き渡し、四十三年九月操業開始、四十四年五月十八日開業式挙行とあるが、同書概略年表の四十四年五月十八日の欄では「苦小牧工場開業式に代え、記念祝宴。室蘭『常磐楼』、札幌『幾代』で催す」となっている。記念祝宴は開かれたが、開業式は実際に行われたのかどうかは読み取れなかった。また、同工場には開業記念日があり、皇太子（後の大正天皇）が同工場を視察した四十四年九月十二日を開業記念日としている。支笏湖温泉地区の「集団施設地区」指定日についても困ったし、困っている。

国立公園の集団施設地区は「国立・国定公園の利用拠点に宿舍、野営場、園地などを総合的に整備する地区として、公園計画に基づき環境大臣が指定する地区」で、簡単にいえば国立・国定公園内でホテルや商店などを建設、営業できる場所のこと。環境省支笏湖自然保護官事務所によると、支笏湖地区では昭和二十七（一九五二）年十月十三日に一般計画、三十二（一九五七）年十月一日に区域指定が行われたとしているが、厚生省（当時国立公園を所管）の初代国立公園管理員（現・自然保護官）の自伝では二十九年四月十九日となっている。支笏湖関連の年表などでも二十九年としているものが多い。

結局、現時点で分からないことは分からないままとして複数の年代を記載

したり、不確定とした。とにかく面倒で頭の痛い作業の連続だったが、昨年三月に第一回版の『支笏湖歴史年表2014』を公開することができた。

ところで、年表作成の言いだしっぺは自分だが、千歳市史編集委員会の守屋憲治専門部員の全面的な協力がなければ一応の完成をみなかったし、今回本誌で公表する改訂版『支笏湖歴史年表2015』も目の目をみなかっただろう。同時に、第一回版ではかなり一生懸命に点検したはずだったが、多くの方々から誤字、脱字、名称違いなどの指摘、さらに新たな事実などをご助言、ご連絡いただき、今回に生かすことができた。この場を借りて感謝するとともに、より正確なものにするためにこれからもご協力をお願いしたい。（敬称略）

追記：『支笏湖歴史年表2015』は三月中旬に支笏湖ビジターセンターホームページでも公開する予定になっている。

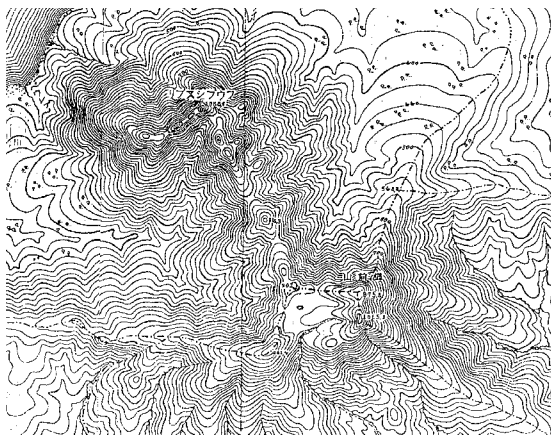


図1 陸地測量部 明治二十九年製版 5万分1「樽前山」一部
現在の溶岩円頂丘(溶岩ドーム)が形成させる前の樽前山地図
「古期溶岩ドーム」として記録されている最初の溶岩円頂丘は慶応3(1867)年の噴火で誕生 7年後の明治7(1874)年の噴火で崩壊した
現在の溶岩円頂丘が誕生したのは35年後の明治42(1909)年の噴火で、地図には古期溶岩ドームの崩壊、飛散で形成された火口原や噴火口と思われる凹地が読み取れる